

令和八年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午前) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は15ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 四、デジタル採点をします。解答は解答欄からはみ出さないように、濃くはっきりと記入してください。
- 五、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 六、試験中、机の上から物を落したり、気分が悪くなったり、何か用ができたりした時は、手を挙げて監督の先生に知らせてください。
- 七、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あそこ、空のてっぺんに、すごく明るい星があるでしょ。あれがこと座のベガだよ」

千春はおばあちゃんに教えた。

「そうね、たしかに明るい」

おばあちゃんも空をあおいで目を細める。

「ベガの左下のほうにあるのが、わし座のアルタイル。あと、その真上にも明るいのがあるよね？ そっちはデネブ」

この三つを結ぶと、夏の大三角になる。

「こんなかたち」

千春は指で宙に細長い三角形を描いてみせた。 I 空をにらんでいたおばあちゃんが、ああ、と声を上げた。

「わかった、あの三つね？」

千春と同じように、指先で三角形をたどる。

「そうそう」

「千春ちゃん、くわしいのね」

「一応、中学で天文部だったから。天体観測したり、文化祭でプラネタリウムを作ったりもしたんだよ」

「本格的ね。だからよく知っているんだ」

感心されると、照れくさい。

「わたしなんか、全然たいしたことないよ。先輩とか友だちとか、もつとずっとすごいもん」

千春が中一のとときに部長をつとめていた三年生の先輩は、大学で天文学を専攻しているそう。那彩は工学部の宇宙物理学科を第一志望にしている。ゆくゆくはロケットの開発にかかわりたいという。

「千春ちゃんも、大学ではそういうことを勉強するの？」

「どうかなあ」

千春はため息をついた。

「よくわかんなくて、わたし」

おばあちゃんが首をめぐらせ、千春と目を合わせた。続きをうながすように、浅くうなづく。

「友だちはみんな、けっこうちゃんと考えてて。ロケットほど具体的じゃなくても、将来こういう仕事をしたくて、だったらこの学部、みたいなの。あと、趣味とか得意なことをのばしたいって子もいる」

①尻すぼみに声が小さくなっていく。

「でもわたしは、そういうのも思いつかない。どうしたらいいんだろ」

おばあちゃんは黙って考えこんでいる。夜道に響くふたり分の足音が、カエルの鳴き声とまじりあう。

「ごめん、なんか、愚痴みたいになっちゃった」

われに返って、千春はあやまった。孫からいきなりこんなことを言われたって、おばあちゃんも困るだろう。

もやもやした気持ちをごまかすまで正直に口に出したのは、はじめてかもしれない。「どうしよう」と友だちと冗談めかして言いあうことや、両親に聞かれて「考え中」とごまかすことはあっても、こんなに心細げな口ぶりにはならなかった。

③この不安は、伝わらない気がするのだ。特に、おとなたちには。

進路が決まらないと言うと、誰もが励ましてくれる。好きなようにやりなさい、とお父さんとお母さんは言う。じっくり考えたらやりたいことが見つかる、と担任の先生は言う。皆さんの可能性は無限大ですよ、と塾の講師は言う。

みんな、前むきだ。千春のためを思い、背中を押そうとしてくれている。そうわかっているのに、足が動かない。

「おばあちゃんには、よくわからないけど……」

おばあちゃんが言葉を探すように口ごもった。千春を元気づけようと考えてくれているのだろう。心配させてしまったかもしれない。

もう弱音を吐くのはやめよう、千春は Ⅱ 決意した。ありがとう、がんばるよ、と笑って話を切りあげよう。

口を開きかけたとき、おばあちゃんが言った。

「大変ねえ」

親身な、^{いた} 労わるような口ぶりだった。思いがけないひとことに^④ 面食らい、千春の返事は少し遅れてしまった。「うん、ちよつと大変」

反省したばかりなのに、本音が口からこぼれた。

「今の若い人は、選ばなきゃいけないんだものね。しかも、^{せんたくし} 選択肢は山ほどあるし」

そうなんだよ、とうなずきかけて、はっとした。

おばあちゃんは、選べなかったのだ。千春と同じ年頃^{としごろ}のとき、なにをやりたいか、なにになりたいか、自分では決められなかった。たった一つの選択肢を受け入れて、そこでがんばるしかなかった。

「なにかを選ぶって、むずかしいことよね」

おばあちゃんの^{こわね} 声はやわらかい。^⑤ 千春は^{めぐ} 恵まれているとたしなめたり、ぜいたくな^{なや} 悩みだと責めたりする気配は、まるでない。

それでも——だからこそよけいに、かもしれない——千春は Ⅲ 恥ずかしくなってきた。

「こんなことじゃだめだね、わたし」

意識して声を張った。

「もつと、しつかりしないと」

千春は若いころのおばあちゃんみたいに、^(注1) 経済的な困難に直面しているわけじゃない。ヒナタみたいに、大切な家族を失ったわけでもない。それなのに、こんなふうにくすぐず落ちこんだりして、情けない。

「千春ちゃんはしつかりしているじゃないの」

「そんなことないよ。夢とか将来の目標とか、別にないし」

しまった、また後ろむきのことを言っちゃった。くちびるをかんだ千春の顔を、おばあちゃんがのぞきこんだ。

「あのね、若いひとを相手に、こんな言いかたはよくないかもしれないんだけど」

あらたまつて言われ、千春はおそろおそろ問い返した。

「なあに？」

「夢や目標って、どうしても必要なもの？」
⑥ どういう意味か、一瞬いつしゆんわからなかった。

「必要、じゃない？」

少なくとも、これまで千春はそう教わってきた。小学校でも中学でも、卒業文集に「将来の夢」を書いた。たぶん高校もそうだろう。

⑦ 「もちろん、具体的な夢や目標があるのは、素晴らしいことだと思う」
おばあちゃんは言葉を選ぶかのように、ゆっくりと言う。

「めざすものがあれば、やる気も出るしね。でも、ないならしないで、無理やり考えなくたっていいんじゃない？」
ひよいと腕うでをのばして、行く手を指さす。

「夢や目標って、よく山のとっぺんにたとえられるけど」

千春も正面に目をやった。星空を背に、くろぐろとした山影やまかげがそびえている。

「最初から、あそこをめぐって登っていくひともいる。だけど、特にそう決めてたわけじゃなくて、目の前の道をてくてく歩いてたら、いつのまにか高いところまで来てたってこともあるんじゃないかな」

「いつのまにか？」

「それはそれで、楽しそうじゃない？ 途中とちゆうでお花畑に行きあたったり、めずらしい鳥を見かけたりするかも。気がむいたら、道草みちくさしたっていいし」

「道草、かあ」

千春にもなんとなく理解できる気がした。

頂上めがけて一直線に、よそ見をせずに上っていくほうが、きっと早い。でも、のんびり歩いて、時には立ちどまって、道端みちばたに咲く野の花に目をとめたり、林の奥おくから響いてくる小鳥のさえずりに耳をすましたりするのも、悪くはないかもしれない。

「夢や目標があってもなくても、経験したことは自分の中に残るからね」

それが、いつかどこかで、思わぬかたちで役に立つこともあるだろう。おばあちゃんのお裁縫さいほうやフランス語みたいに。

「キビブハバハ」

突然、おばあちゃんが謎めいた言葉をつぶやいた。

「え？　なんて？」

千春の耳には、呪文じゅもんのようにもおまじないのようにも聞こえた。

「フランスでよく使う言いまわしらしいの。このあいだ話してた、フランス人の友だちが教えてくれた」

「どういう意味？」

「直訳すると、生きてたらわかる、って感じかな」

おばあちゃんはアルファベットの綴りつづも教えてくれた。

千春が音から想像していたのとは、だいぶちがう。フランス語では、Rの発音が鼻にかかって「ハ」と聞こえるらしい。前半の「キビブハ」が「生きるひと」で「ベハ」が「知る」という意味だという。

「X」、ってことみたい」

日本人はまじめすぎる、とおばあちゃんの友だちはたびたび言っていたそうだ。先のことをあれこれ思い悩みすぎだ、もっと気楽にしたらいいのに、と。

「キビブハベハ」

千春もまねして唱えてみた。やっぱりおまじないみたいだ。なんだか楽しい気分になってくる。

と、気を散らしていたら、つまずきそうになった。

「わっ」

「危ないよ。暗いから、気をつけて」

おばあちゃんが千春の腕をとった。

乾かわいた小さな手のひらを、千春はⅣ握にぎった。夜道の先に、家のあかりが見えてきた。

(瀧羽麻子『かわせみのみちくさ』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) ヒナタ……近所に住む、小学五年生の男の子。母親を病気で亡くしている。

問一 文中の I Ⅳ にあてはまる語句を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ゆっくりと イ じっと ウ にわかに エ ひそかに オ ぎゅっと

問二 — 線部①「尻すぼみに声が小さくなっていく」とありますが、このときの千春の心情を説明したのものとして最も適

当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の考えに自信が持てず、どうしてよいかわからず、投げやりな気持ちになっている。

イ 自分の将来に対する不安はあるが、そのことで祖母に心配をかけたくはないと考えている。

ウ 祖母に自分の気持ちを正直に打ち明けることに対して、恥ずかしさや照れくささを感じている。

エ 友人や先輩と違って、自分に夢や目標がないことを引け目に感じて、自信を持てずにいる。

問三 — 線部②「こんなこと」とありますが、どのようなことですか。自分で考えて、十字以内で答えなさい。

問四 — 線部③「この不安は、伝わらない気がするのだ。特に、おとなたちには。」とありますが、

(1) この部分で用いられている、表現の工夫(技法)の名称を答えなさい。

(2) 「特に、おとなたち」に「伝わらない」と千春が思う理由を二十五字以内で答えなさい。ただし、書き出しは「おとなたちは」で始めることとします。

問五 — 線部④「面食らい」とありますが、「面食ら」うとはどのような意味ですか。この場面での意味として、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 驚いて、あきれること
- イ 困り果てて、苦しむこと
- ウ びっくりして、とまどうこと
- エ はっとして、舞い上がること

問六 — 線部⑤「千春は恵まれていたしなめたり、ぜいたくな悩みだと責めたりする」とありますが、祖母と比べて千春のどのような点が「恵まれていた」のですか。二十字以内で答えなさい。

問七 — 線部⑥「どういう意味か、一瞬わからなかった」とありますが、千春はなぜ祖母のことばの意味を理解できなかったのですか。この理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 祖母の質問の内容が、だれもがすぐに答えが出せる、聞くまでもないことのように思えたから。
- イ 祖母の質問の内容が、あまりに唐突で、まったく的外れなことのよう感じられたから。
- ウ 祖母の質問の内容が、あえて考えないようにしている、触れてほしくないものだったから。
- エ 祖母の質問の内容が、高校生には理解しづらい、深い意味がこめられるもののように感じたから。

問八 — 線部⑦「おばあちゃんは言葉を選ぶかのように、ゆっくりと言う」とありますが、おばあちゃんは何でこのように話しているのですか。この理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夢や目標を持つことが大切であることを、千春にきちんとわかってほしいと思っていたから。
- イ 自分のことばが夢や目標を持つことを否定していると誤解されないように、慎重に話していたから。
- ウ おばあちゃん自身も考えがまとまっておらず、千春の将来について迷いながら話していたから。
- エ ゆっくりと話をするので、夢や目標に対する自分の考えを千春に強く印象づけたかったから。

問九 — 線部⑧「突然、おばあちゃんが謎めいた言葉をつぶやいた」とありますが、おばあちゃんがつぶやいた「謎めいた言葉」には、千春に対するおばあちゃんのどのような気持ちがかめられていたと思いますか。三十字以内で答えなさい。

問十 本文中の X にあてはまる語句としてもつとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 時間が経てば、そのうちいろんなことがわかってくる
- イ 今、苦しいことも、いつかはきつとよい思い出になる
- ウ 人生には、よいこともあれば、悪いこともある
- エ いやなことやつらいことでも、時間が経てば忘れてしまう

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本人に要求されているコミュニケーション能力の質が、いま、大きく変わりつつあるのだと思う。いままでは、遠くで誰かが決めていることを何となく理解する能力、空気を読むといった能力、**A** 集団論でいえば「心を一つに」「一致団結」といった「価値観を一つにする方向のコミュニケーション能力」が求められてきた。

しかし、もう日本人はバラバラなのだ。

さらに、^①日本のこの狭い国土に住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない。

B、この新しい時代には、「バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく能力」が求められている。

私はこれを、「協調性から社交性へ」と呼んできた。

「平田君は、自分の好きなことは一生懸命、集中して頑張るけれども、**X**に欠けるようですよ」と小学校一年生から通信簿に書かれてきたような人間が、作家や芸術家になる。私自身、自分の好きなことしかやってこなかったし、**X**はなにもと自覚している。

しかし、演劇は集団で行う芸術なので、演劇人には「社交性」はあるのだ。私たちは、幕が下りるまではどんな嫌な奴とでも、どうにかして仲良くする。プロの世界などはひどいもので、舞台上では、「あなたがいないなければ死んでしまうわ」と言っている、楽屋に帰ればそっぽを向いている連中もたくさんいる。それでいい舞台ができるのなら、私としてはまったくかまわない。^②これもまた「社交性」だ。

しかしこの社交性という概念は、これまでの日本社会では「上辺だけのつきあい」「表面上の交際」といったマイナスのイメージがつきまとった。私たちは、「心からわかりあう関係を作りなさい」「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」と教え育てられてきた。

C もう日本人は心からわかりあえないのだ……と言ってしまうと身もふたもないので、たとえば高校生たちには、私は次のように伝えることにしている。

「心からわかりあえないんだよ、すぐには」

「心からわかりあえないんだよ、初めからは」

この点が、^③いま日本人が直面しているコミュニケーション観の大きな転換の本質だろうと私は考えている。

心からわかりあえることを前提とし、最終目標としてコミュニケーションというものを考えるのか、「いやいや人間はわかりあえない。でもわかりあえない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて、それを広げていくことならできるかもしれない」と考えるのか。

「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」という言葉は、耳に心地よいけれど、そこには、^④心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除するシマ国・ムラ社会の論理が働いてはいないだろうか。

実際に、私たちは、パレスチナの子どもたちの気持ちはわからない。アフガニスタンの人びとの気持ちもわからない。

しかし、わからないから放っておいていいというわけではないだろう。価値観や文化的な背景の違う人びとも、どうにかして共有できる部分を見つけて、最悪の事態である戦争やテロを回避するのが外交であり国際関係だ。

好むと好まざるとにかかわらず、国際化する社会を生きていかなければならない日本の子どもたちに、より必要な能力はどちらだろう。

D ^{アルファ}協調性がなくていいとは言わないが、日本の子どもたちは世界標準から見れば、まだまだ集団性は強い方だ。ならば ^{アルファ}プラスαの能力として、これからの教育が子どもたちに授けていかなければならないのは、この「社交性」の方なのではないか。

(中略)

^(注)フィンランド・メソッドに象徴されるヨーロッパの国語教育の主流は、インプット⇨感じ方は人それぞれでいいというものだ。文化や宗教が違えば、感じ方は様々になる。前章までで説明してきたように、車内で他人に声をかけるといふ行為一つとっても、それを失礼だと感じる人もいれば、声をかけなければ失礼だと感じる人もいる。これは内面の自由、良心の自由に関わることなので、強制することはできないし、教育の場でそれを一律にしてはいけない。特に宗教などが違っていると、これを強制することは人権問題にまでなる。

しかし、多文化共生社会では、そういったバラバラな個性を持った人間が、全員で社会を構成していかなければならない。だ

からアウトプットは、一定時間内に何らかのものを出しなさいというのが、フィンランド・メソッドの根底にある思想だ。

これは現行の日本の国語教育と正反対の構図になっていることがわかるだろう。私たちは、「この作者の言いたいことは何ですか？ 五〇字以内で答えなさい」といった形でインプットを狭く強制され、一方でアウトプットは個人の自由だということで作文やスピーチでお茶を濁してきた。しかし、現実社会は、どちらに近いだろうか。アウトプットがバラバラでいいなどという会社があったら、即刻潰れてしまうだろう。しかし、どの企業も多様な意見や提案を必要としている。問題は、その多様な意見を、どのようにまとめていくかだ。

フィンランドの教育においては、いい意見を言った子どもよりも、様々な意見をうまくまとめた子が誉められると聞く。日本では、A、B、C、D、Eと様々な意見が出て、最終的な結論がBとなったら、B君が先生に誉められる。あるいはユニークな意見を言ったCさんが誉められるかもしれない。しかしフィンランドでは、何も意見を言わなかったとしても、F君が全体のとまりまとめをしたとしたら、彼が一番誉められる。日本でそんなやり方をしたら、「F君は、何も意見を言っていないくて、ただまとめただけなのに誉められるなんてずるい」と言われるかもしれない。

OECDがPIISA調査を通じて求めている能力は、こういった文化を越えた調整能力なのだ。これを一般に「グローバル・コミュニケーション・スキル（異文化理解能力）」と呼び、その中でも重視されるのが、集団における「合意形成能力」あるいはそれ以前の「人間関係形成能力」である。

このような話を教育関係の講演会ですると決まって、「あ、金子みすゞですね。『みんなちがって、みんないい』ですね」と言う先生方がいる。私はそうは思わない。そうではないのだ。

「みんなちがって、たいへんだ」という話をしているのだ。

OECDの基本理念は、多文化共生にある。

多文化共生とは何か。それは、企業、学校、自治体、国家など、およそどんな組織も、異なる文化、異なる価値観、異なる宗教を持った人びとが混在していた方が、最初はちよつと面倒くさくて大変だけれども、最終的には高いパフォーマンスを示すという考え方だろう。

先に見たように、成長型の社会では、ほぼ単一の文化、ほぼ単一の言語を有する日本民族は強い力を発揮した。しかし、成熟型の社会では、多様性こそが力となる。少なくとも、最新の生物学の研究成果が示すように、多様性こそが持続可能な社会を約束する。

だとすれば、これから国際社会を生きていかなければならない子どもたちには、「最初はちょっと大変だけれど」の、「大変さ」を克服する力をつけていこうというのがPISA調査の最大の眼目だろう。

しかし日本では、調査結果のじり貧状態だけに目がいつて、学力低下の議論が巻き起こり、教科学習のコマ数を増やし、せっかく作られた総合的な学習の時間を減らすという愚挙が行われた。二〇〇〇年代後半の日本の教育政策がいかにトンチンカンなものになっていたかがわかるだろう。それはある種の教育の鎖国状態と呼んでもいい。

みんなちがって、たいへんだ。

しかし、この「たいへんさ」から、目を背けてはならない。

(平田オリザ『わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) フィンランド・メソッド……フィンランドの教育法のこと。「メソッド」は手法を指すことば。

(注2) OECD……「経済協力開発機構」のこと。経済成長・開発途上国支援・自由かつ多角的な貿易の拡大を目的とした国際機関を指す。

(注3) PISA調査……OECD加盟国を中心に実施されている調査。義務教育修了段階の生徒が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測ることを目的としている。

問一 文中の A) D) にあてはまることばを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ しかし ウ もちろん エ あるいは オ だから

問二 — 線部①「日本のこの狭い国土に住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない」とありますが、この説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本国内にも、日本文化を深く理解していない日本人がいることを指摘している。
イ 日本国内には、日本文化を軽視する外国人が増えていることを指摘している。
ウ 日本国内には、多様な文化的背景を持つ人が存在するということを指摘している。
エ 日本国内から、日本文化的な生活様式が徐々に失われつつあることを指摘している。

問三 文中の X) にあてはまることばを本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問四 — 線部②「これもまた『社交性』だ」とありますが、ここで言う「社交性」とはどのようなものですか。二十五字以内で説明しなさい。

問五 — 線部③「いま日本人が直面しているコミュニケーション観の大きな転換」の説明として、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 互いの立場や背景の一致を目指す価値観から、個々の意見に違いがあることこそが重要であるという価値観への転換。
イ 相手と心をつなげるようなコミュニケーションから、相手との価値観の違いを前提にした共存のための対話への転換。
ウ 表面上だけ一致団結したように見せる協調性から、より深い理解と共感を重視する「真の協調性」への転換。
エ 情報化社会におけるスピード重視のコミュニケーションから、じっくりと時間をかけた相互理解を重視するスタイルへの転換。

問六 — 線部④ 「心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除するシマ国・ムラ社会の論理」とありますが、どう

してこのような論理が働くのですか。筆者の主張としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本はこれまでに、集団で同じ考え方を共有できるような、「和」を大切なものと考えて尊重してきたから。

イ 外部からの影響を防ぐために、鎖国をはじめとして日本国家が異なる文化を積極的に排除する政策をとってきたから。

ウ 対立を避け、外見上の和をたもつことが円滑な人間関係とされ、深い理解は必要ないとみなされてきたから。

エ 歴史的に日本は異文化との接触がほとんどなかったため、他者の多様性を受け入れる経験が不足していたから。

問七 — 線部⑤ 「フィンランドでは、何も意見を言わなかったとしても、F君が全体のとりまとめをしたとしたら、彼が一番

誉められる」とありますが、F君が誉められた理由の説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の意見を押しつけることなく、他人の発言を尊重しながら議論に貢献したという姿勢を評価されたため。

イ グループ全体の流れを読み取り、要点をおさえて説得したことで、個々の持つ価値観を一つにまとめあげたため。

ウ 目立たないながらも、他者の意見を活かし、集団の考えを一つにまとめるという「調整役」を果たしたため。

エ 自分の意見を出さずに、議論に深入りしないことで、集団内の対立を避けた協調的態度が評価されたため。

問八 — 線部⑥ 「この『たいへんさ』から、目を背けてはならない」とありますが、以下の問いに答えなさい。

(1) なぜ「たいへん」のですか。二十字以内で説明しなさい。

(2) 「目を背けてはならない」のはなぜですか。二十五字以内で説明しなさい。

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 父はシュツパン社に勤めている。
- 2 哲学の理論をタイケイ的に学ぶ。
- 3 話し合いがナンコウする。
- 4 ドウソウ会に出席する。
- 5 コウリツよく作業を進める。
- 6 新商品をセンデンする。
- 7 貴重なシゲンを保護する。
- 8 温度を一定にタモつ。
- 9 交通規制をカイジヨする。
- 10 野菜をせいろでムす。

